

## 「砂の女」を読んで

情報通信工学科 3年 天野 未来

わざと心の奥にしまい込んで、他人にはおろか自分にさえも隠し通してきたもの、黒くてどろどろとしたそれを心の底から引き出され目の前に突き付けられたような感じがした。

ひとりの妻子を持ちの教師が砂丘へ昆虫採集に行き、今にも砂丘に埋もれそうな部落に足を踏み入れてしまう。そこでは、砂から村を守るためにいくつかの家が砂かきをしなければならぬ。一夜の宿を借りるつもりだったその男は、だまされてそれらの家のひとつに「働き手」として無理やり閉じこめられる。夜になると男は、家が潰され部落が砂に埋もれないように、その家の女と二人で砂かきをする。夜いくら砂をかいても、翌朝になればまたどっさりと砂は積もっている。男にとっては全く意味のない不毛な労働が続けられた。男は最初激しく抵抗し、幾度も脱走を試みる。しかし、しだいにその無意味な砂かきを、自分の日課として当然のように受け入れていくのである。男の心理が微妙に変化していくのである。

私はここである恐怖の念を抱いた。なぜなら、男の心理が変化していくにつれて、私の心の奥にその変化はそれほど不思議に思わない「もう一人の自分」の姿に気づいたからである。強引なまでの文章の力で、いつの間にか私も砂の世界に引き込まれていた。そして、いつしか「もう一人の自分」は男と同じように、ある心地良ささえ感じていたのだ。恐ろしい。こんなことあるはずがない。何ら文化的営みもなく、その砂穴から外に出ることも許されない生活、ただただ砂をかき、あとは食べて寝るだけの、そんな非人間的な状態に置かれた時、人はこうもたやすく変わってしまうのか。それまで男が持っていた生活や常識はどこへ行ってしまったのか。本来人間とは精神的・文化的に満たされた温かい家庭の中でこそ生きていくことができるのだ。崇高な理想を抱き、社会の中で自分の存在価値を認められることに喜びを見出しながら生きていくべきものなのだ。それらが自分の手になかったら、一生懸命追い求めなければならないし、その中でこそ「生きている」と実感できる存在でなければならない。そういう姿こそ人間の最も美しい姿なのだ。男の心理の変化は、そのように信じて疑わなかった私の心に、決定的な不安と不信を植えつけた。そこで私は「もう一人の自分」に言いかけようとした。「これはフィクションである。なるほど、もしかしたら他人はこの男のようになってしまうかもしれないが、私は違うぞ」と。

そうはいっても、心の底でゆっくりと首をもたげてくる疑問と不安は抑えようがなかった。男の砂穴での生活、それは私たちの現代の生活にそのまま当てはまるのではないだろうか。毎日決まった時間に起き、決まった時間に通勤・通学し、決まった時間に帰宅する。自由なはずの休日ですえ、型にはまった過ごし方しかない。まるで閉ざされた世界で

生活しているようだ。多くの情報が一方的に流され、それをどう受けとめるかという解説さえついてくる。私達はそれを決められたように受けとめ、皆と同じ意見と感情を持つようになる。男は言う、自由な外の世界に戻りたいと。しかし本当にこの世界は自由なのだろうか。さらに、砂穴での生活に慣れたころ、男はこの生活も外の生活と何の変わりがあるだろうかという考えに立ちいたる。不当なことを不当と思わなくなったとき、それは正当なこととして成立してしまう。私達は自由だと思いながらも、本当はその幻想の中で躍らされているだけではないのか。ただその生活の不自然さに気づかないのだ。いや、気づかないふりをしているだけなのかもしれない。

結局私もあの男のように砂の世界に閉じ込められていくのだろうか。また、男の立場に置かれた時、言い換えれば今この画一化された社会において、私は自分の理念を堅持し、自信を持って生きてゆくことができるのだろうか。ますます自信がなくなっていく。人間とは何と脆く掴み所のない存在なのか。結局、私は自分のことさえ理解していないのだ。なんと愚かしいのだろう。これまで、男の生き方を認め受け入れた「もう一人の自分」がいると述べてきた。しかし、これは逃避的な言い方であったと今は思う。真実は真実として、弱さは弱さとして、認識しなければならなかったのだ。だれもが心の底に、きれいごとではすまされない、暗いどろどろした感情をもつ。その事実は認めたくないことだけれどもそれらは確かに自分自身であるし、それなくしては一個の人間として完全にならないのではないだろうか。

私は今、それらのマイナス面に自分の一部としてむしろ積極的に目を向け、正しく認識や自覚をした上で、自分なりの生き方や幸せ、理想といったものをもう一度じっくりと考えていきたいと思う。また、そうした方向の中でそれを実現させる幅広い意味での「人間の強さ」を身につけることができるのだ。

書名『砂の女』 著者名 安部公房 出版社 新潮社